

日本語版いじめやセクシュアルハラスメント場面における傍観者介入尺度の作成

○藤原 千鶴・赤澤 淳子・井中野 美奈
(福山大学 人間文化学部 心理学科)

研究の目的

いじめの認知件数は年々増加しており (文部科学省, 2025), 16-24歳の26.4%が学校現場や学校関係者からの性暴力被害を受けている (内閣府, 2023)。これらの問題は学校で生じているため, 傍観者の介入は有力な予防手段となることが考えられる。

傍観者の援助行動に関する研究では, Latané & Darley (1970 竹村・杉崎訳 1997) の傍観者介入モデルが広く知られている。傍観者介入モデルは, 傍観者効果 (Latané & Darley, 1968) を基盤とし, 問題に介入するまでの5つの連続したステップ (①出来事に気づく, ②非常事態と判断する, ③助ける責任を持つ, ④援助法が分かる, ⑤介入する) を概説している。

このモデルを教育分野に応用するために, Nicke rson et al. (2014) はBystander intervention in bullying and sexual harassment (以下, BI尺度とする) を開発した。BI尺度は, 傍観者介入モデルの5つのステップに対応した5因子 (16項目) から構成されており, 学校での問題に対応している。しかし, 日本では傍観者介入モデルに基づいた測定ツールは開発されていない。そのため, 本研究では, BI尺度の日本語版を作成し, 妥当性 (研究1) と信頼性 (研究2) を検討することを目的とした。

方法

研究1 構成概念妥当性を検討するために, A高校に在籍する2年生157名 (男性71名, 女性86名, 平均年齢は16.38歳, $SD = 0.49$) に質問紙調査を行った。調査にはフェイスシート, 日本語版BI尺度, 小中学生用対象別向社会的行動尺度 (村上他, 2016), 共感性プロセス尺度 (葉山他, 2008), 中学生におけるいじめと学校ストレスの関連尺度 (神藤・齊藤, 2001) を用いた。

研究2 再検査信頼性を検討するために, A高校にて研究1の調査の2か月後に再調査を行い, 全2回の調査に適切に回答していた112名 (男性47名, 女性65名, 平均年齢は16.39歳, $SD = 0.49$) のデータ

を分析対象とした。調査内容は, フェイスシートと日本語版BI尺度であった。

分析方法 統計ソフトIBM SPSS Statistics 24

倫理的配慮 福山大学研究安全倫理委員会の承認を得て実施された (2024-H-40-05号)。

利益相反 演題発表に関連し, 開示すべきCOI関係にある企業はない。

結果

研究 1 日本語版 BI 尺度と妥当性検討変数の間の相関係数を算出した。その結果, すべての変数の組み合わせにおいて有意な相関が得られたが, 「出来事に気づく」のみ, 他の変数間の相関とは逆の相関が算出された (Table 1)。

Table 1

日本語版 BI 尺度の各因子および全体の合計得点と, 収束的妥当性の検討のための各変数との相関分析の結果

	出来事に気づく	非常事態と判断する	助ける責任を持つ	援助法が分かる	介入する	日本語版 BI尺度全体
向社会的行動	-.17*	.23**	.40***	.45***	.38***	.46***
共感性	-.16*	.29***	.53***	.40***	.44***	.52***
いじめの容認態度	.22**	-.19*	-.52***	-.43***	-.49***	-.52***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

研究 2 日本語版 BI 尺度の全 2 回のデータ間での相関係数を算出した。その結果, すべての変数の組み合わせにおいて, 有意かつ, 中程度から強い相関係数が得られた。「出来事に気づく」と「非常事態と判断する」は $r = .50$, 「助ける責任を持つ」 $r = .69$, 「援助法が分かる」 $r = .70$, 「介入する」 $r = .65$, 日本語版 BI 尺度全体では $r = .78$ であり, すべての相関係数は $p < .001$ であった。

考察

本研究では日本語版 BI 尺度を作成し, その妥当性および信頼性を検討した。構成概念妥当性は, $r = .10$ は低い, $r = .30$ は中程度, $r = .50$ は高い妥当性を示すとされている (Cohen, 1988)。また, 再検査信頼性は, 一般に $r = .70$ 前後が得られることが多いが, 再検査までの期間が長いと低下することが指摘されている (小塩, 2016)。したがって, 本研究で得られた妥当性, 信頼性はやや低い因子もあったが, 全体としては一定の水準を示していると考えられる。